

【研究ノート】

ポーランド語のカタカナ転写における 若干の問題

—アクセントをおかれた母音の知覚について—

マジエツツ・アグネシカ

総合研究大学院大学 文化科学研究科 比較文化学専攻

本調査はパイロットスタディーとして位置づけられ、ポーランド語のある単語をカタカナ表記に転写する際、音引きを使うべきか否かという疑問がきっかけで始めた調査である。日本語を母語とする話者に、アクセントのあるポーランド語の単語が長音として聞こえるのか、それとも短音として聞こえるのか、を回答してもらう実験をおこなった。その結果、サンプルの68%には長音を示す記号（音引き符号や拗音の小文字）による表記が適当であると見なされた。一方、大多数の被験者が短音として認識する例も少ないながら（12%）存在するということが判明した。

キーワード：音声転写、カタカナ表記、ポーランド語、音引き符号、単語のアクセント

1. はじめに
2. 問題の所在
3. 調査方法
4. 結果
5. 考察
6. まとめと今後の課題

1. はじめに

ある言語の語彙を他言語の文字で表記することがしばしばある。たとえば日本語に外国語の地名などをできるだけもとの発音に近い形でとりこみ、カタカナで表記しようとする例などである。このような場合、しばしば翻字（transliteration）という語も用いられるが、これは一般に音声を無視し、機械的に文字と文字を対応させることを指しているため、ここでは転写（transcription）と呼ぶことにする。

さて、言語Aの語彙の音声を言語Bの文字で表記する場合には、以下のような基準を満たす必要があると考えられる。

第一に、転写により、言語Aの音声が言語Bの字母により、できるだけ正確に再現されているかどうかということがあげられる。これは言い換えれば、言語Bの母語話者にいかに音声認識されるかということである。とはいえ、目標の言語Bには言語Aの音声に対応する音声や文字がない場合、あるいは音素配列論的（phonotactics）

な制約から言語Bではゆるされない場合（音声結合や語中の位置など）があり、あくまでこの範囲で転写はおこなわれることになる。

第二の基準は、転写に用いられるルールが簡単、明快であるかどうかということである。ルールが複雑な場合、たとえば言語Aの音声は精密に近い形で転写されていても、それがあまりにも複雑な場合には実用には向かないことになる。

三つ目には、転写の規則が言語Bの一般的な表記法からみて、大きく逸脱するものではないことがあげられる。たとえ言語Bの字母を用いている場合であっても、あらたな転写のルールをむやみに設定しては、そのルールを知らないものにとっては、読むことは困難になる。

最後に、すでに言語Bにおいて慣習的に確立されている言語Aの特定の語の表記をどこまで守るかということがあげられる。場合によっては、日本で確立、あるいは長く定着している外来語の表記がたとえ現実の発音とは大きく異なっている場合でも、転写を大きく変更することにより、従来のもと同定できず混乱を生ずる可能性もある。

いかなる外国語表記であれ、以上の点は関わってくるが、これらは相互に対立する場合も考えられることから、全体としてこれらの条件を現実的でバランスのとれた形で満足させるものがある必要がある。

本論では以上を踏まえ、ポーランド語の固有名詞の日本語表記にかかわる問題の一つとして、アクセントが置かれた母音のカタカナ表記において、日本語母語話者には長短いずれとして認識されているかについて、調査に基づき考察する。

2. 問題の所在

上で述べたように、ポーランド語を日本語カタカナで転写する際には、上にあげた4点をバランスよく満足させる必要があるが、本論ではまずポーランド語の語彙においてアクセントを置かれた母音の受けとめかたおよび表記に焦点を

あててみた。その際、問題となるのは、具体的に以下のような点である。

日本語文献（ポーランドの歴史や文化にかかわる内容）において、カタカナで転写されたポーランド語の固有名詞には、音引き符号の使い方に「ゆれ」が見られる。その「ゆれ」はポーランド語のアクセントを置かれた母音の転写においてみられるもので、例えば、Lublin ['lubɫin] が「ルブリン」や「ルーブリン」と表記される場合である。

ポーランド語のアクセントは、実はポーランド言語学においても以前からその実体の解釈に関して、いくつかの異論が存在している。まずもっとも早くこの問題に注目したのは、20世紀初めのBenni (1923) によるものであった。しかし、それからほぼ一世紀たった今でも、その問題は根本的には解決されてはいない。ポーランド語ではアクセントの置かれた母音は3つの形で現れる。すなわち他の母音に比べて、より強く、より高く、より長く発声する。その三つの要因を同時に発声するか、二つかもしくは一つの要因しか使わない場合がある。場合によっては、これら三つがすべて共起するが、二つ、また一つしか現れない。論争はこれらのうちどれが最も根本的なアクセントの決定要因であるかということに関して、強弱説 (Benni 1923等) か、高低説 (Jassem 1962; Dogil 1999等) か、そして長短説 (Łukaszewicz and Rozborski 2008等) という三つのアプローチがある。日本語へのカタカナ転写においても、このようにさまざまな音声特徴を伴って発音されるポーランド語が、日本語話者にとってどのように知覚されるかが関わってくることになる。

3. 調査方法

本研究ではポーランド語におけるアクセントを伴って発音される母音が日本語母語話者にいかに知覚、されるか調査することを目的として、ポーランド語音声サンプルを28¹⁾ 例用意した、

被験者の日本語母語話者10人(男性4名、女性6名、平均年齢36歳)に防音室内で、それらを聞かせアンケート用紙にあらかじめ設定したカタカナによる音声転写表記3例からもっとも適当と思われるものを選んでもらった。サンプルはポーランドの地名で、Wikipediaのポーランドに関する記事から筆者が抜粋し、ポーランド人母語話者に発声してもらったものである。それぞれのサンプルはあらかじめ録音されたものを、被験者に対して音声分析用のソフト(Praat)で3度、自動的に繰り返して聞かせるように処置した。3度の繰り返しは1000msの間を入れて連続して聞かせた。サンプル28例のうち最初の三つは、耳を慣らすためのテストとして聞かせ、これらには返答は求めなかった。

返答を記入するアンケート用紙は表となり、縦軸にはサンプルとなる語の番号が記入され、横軸にそれぞれの語につき日本語のカタカナ転写表記を3種記入した。(巻末の表4を参照)。第一の列①は音引きなしの表記である。例えばサンプル1 (Warszawa [var'sava]) に対して「ワルシャワ」という表記である。次の第二の列②には、音引き符号ではなく、中間的な長さの標識として、日本語の小文字「ァ」、「ェ」、「ィ」「ォ」、「ウ」をつけた²⁾。例えば、先にあげた語が「ワルシャァワ」となるケースである。第三の列③には、長音を示す音引き符号を用いた。この場合は「ワルシャァワ」と表記される。そして以上3種の表記バリエーションの次に、列④として「わからない」という項目を設けた。被験者には、サンプルの語を聞かせた後、3つ(列①～③)の表記のうち、一番発音に合っていると思われる表記を選び、アンケート用紙のその表記に○をつけるように頼んだ。表には聞かせるサンプルの語は原語の綴りや国際音声字母による発音表記は記さず、番号のみを記入した。これは表記に惑わされず、聞き取った音声のみによる判断をうながすためである。

4. 結果

上記の調査を10人の被験者に対しておこない、回収したアンケートをそれぞれのサンプルごとに集計したものがパーセントとして表1として示されている。

表2は、表1を整理したもので、列①の数はそのまま「Short」(短音の意味)に記入し、表1の列②と列③の結果は合計し、表2の列「nShort」(non-short短音ではない意味)に記入した。これは、ポーランドのアクセントをとまなう母音を短音として認識された場合とそれ以外を明確に分離するためである。

表1の列④の結果は、表2の列「Difficult to say」に入力した。アクセントがある音節の長さを聞き取るのが困難であったという意味である。

表1 調査結果 (1)

サンプル番号	列① %	列② %	列③ %	わからない %
4	60	40	0	0
5	10	60	30	0
6	90	10	0	0
7	10	70	20	0
8	30	10	50	10
9	0	50	50	0
10	0	50	30	20
11	10	50	40	0
12	40	10	50	0
13	0	80	20	0
14	10	20	70	0
15	80	10	10	0
16	0	60	40	0
17	0	20	80	0
18	0	60	40	0
19	50	20	30	0
20	40	10	40	10
21	20	60	20	0
22	70	20	10	0
23	60	20	20	0
24	20	30	50	0
25	0	60	30	10
26	0	50	50	0
27	10	60	30	0
28	10	40	50	0

表2において背景がグレーのセルの意味は、「Short」列と「nShort」列のセルにあるパーセントの値の差が20%を超えるという意味である。

表2 調査結果 (2)

サンプル番号	Short %	nShort %	Difficult to say %
4	60	40	0
5	10	90	0
6	90	10	0
7	10	90	0
8	30	60	10
9	0	100	0
10	0	80	20
11	10	90	0
12	40	60	0
13	0	100	0
14	10	90	0
15	80	20	0
16	0	100	0
17	0	100	0
18	0	100	0
19	50	50	0
20	40	50	10
21	20	80	0
22	70	30	0
23	60	40	0
24	20	80	0
25	0	90	10
26	0	100	0
27	10	90	0
28	10	90	0

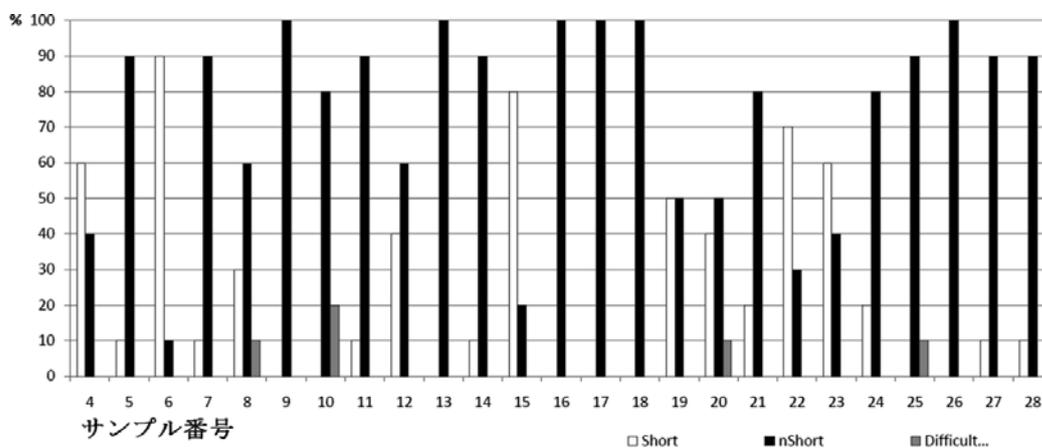
表2の数値を棒グラフで示したのがグラフ1である。それぞれの項目で、左側の白いバーは「Short」、右側の黒いバーは「nShort」、その右にさらにグレーのバーがある場合、「わからない」の意味を持つ。

調査の結果をみると長音として認識されるものが多いなかで、短音として認識されるものもいくつか存在することが明らかになった。ポーランドでは、アクセントは通常長音として発音されることが一般的であり、日本語母語話者にもそのように認識されるものと予想したが、結果はやや意外であった。筆者が当初想定したように、アクセントのある母音すべてのカタカナ表記に音引き符号を用いるという考えは適切ではないことが判明した。

5. 考察

次に表3により、長音とみなされたサンプルと短音とみなされたサンプルを分類し、全体としての傾向を分析することにした。

分類化において重視した基準は、表2の列「Short」と列「nShort」の数値の差が20³⁾を超えたサンプルの数であった。DZ (“Definitely Zero”)のグループにある単語は、20%以上の支持をもって、長音を表す記号(音引き符号、拗音の小文字)を全く使わずカタカナ化する単語である。グループDW (“Definitely With”)の単語



グラフ1 調査結果 (2)

表3 ポーランド語の分類化 (DZ、DW と BO のグループ)

グループ	サンプル番号	回答 (合計)	回答 (%)
DZ	6, 15, 22	3	12
DW	5, 7, 8, 9, 10, 11, 13, 14, 16, 17, 18, 21, 24, 25, 26, 27, 28	17	68
BO	4, 12, 19, 20, 23	5	20

は、カタカナ化する時に、20%以上の支持を持って、長音を表す記号を使うとされたものである。グループBO (“Both Okay”) は長音を表す記号の使用に関して、被験者の回答にははっきりとした差がなかったケースである。

さてこのようにポーランド語のアクセントの置かれた母音のカタカナ表記には一定の傾向はあるものの、ゆれも存在することが明らかになったが、その理由はなにであろうか。全般的に言えるのは、ポーランド語のアクセントを置かれた母音は、日本語では長音と知覚されることが68%と圧倒的に多いといえる。しかし、一方では短音と認識されるものが12%あり、その場合、被験者の大多数の支持によるものであったことも注目される。また短音、長音それぞれを選んだ被験者の差が20%以下と拮抗している例が、5例、20%のみであったという結果は、日本人母語話者においては、ポーランド語のアクセントを伴う母音の知覚は、比較的共通しているということができよう。

それでは長音表記を選択された語が68%と大多数を占める中で、12%とはいえ、ほとんどの被験者に短音として認識された語が存在したのはいかなる理由によるのであろうか。第二節「問題の所在」でも述べたように、ポーランド語ではアクセントの置かれた母音は、より強く、より高く、より長く発声される。以上の実験では、日本語母語話者の受けとめかたが、単語によって長音と認識されるほとんどの場合と短音と認識される少数の場合に二極に分かれることが明らかになったとはいえ、それらを分けた原因までは立ち入っていない。可能性として、ポーラ

ンド語の個々のサンプル自体の音声特徴にみられる差異が、日本語母語話者の長音の認識に微妙に作用したことが推測されるが、どのような音認識のメカニズムが作用しているかは、本論の目的にははいておらず、今後の課題となろう。

6. まとめと今後の課題

本調査は、ポーランド語のある単語を日本語に転写することになった筆者が、音引きを使うべきか使わないべきかと迷ったことがきっかけであった。そして日本語を母語とする話者が、ポーランド語のアクセントのある母音を長音として聞くか、短音として聞くか、自然な方に従いたいと思ったのである。本調査ではそれをパイロットスタディーとして位置づけ、限られたデータであるが、当初、これに関する問題の所在のみを明らかにしようとした⁴⁾。

実験では、日本語母語話者が、アクセントのある母音を長短いずれとして認識しているかにつき、冒頭であげた転写の条件のうち第一番目の音声認識の観点から、できるだけ客観的に数値をもって明らかにするため、想定しうる3つの選択肢を設定して調査した。

これにより、25例のサンプルの68%は長音をしめす記号（音引き符号や拗音の小文字）による表記が適当であるとみなされているということが判明した。しかし、一方で、大多数の被験者が短音として認識する例も少ないながら(12%)存在する。日本語ではすでに、ワルシャワ（サンプル番号1）、ポスナン（同5番）、グダニスク（同10番）などの地名がある程度知られ定着していることから、これらの影響の存在も

予想されたが、これらの地名の表記さえも、長音符号を用いるのが適当と認識されたのは意外であった。ポーランドのアクセントを置かれた母音の多くが長音として認識されるなか、いくつかは短音として認識されたメカニズムの解明とともに、今後の研究の課題としたい。

注

- 1) 本調査は問題提起としての研究ノートであるため、調査は予備調査としてサンプルの数が限られている。
- 2) 第一節「はじめに」で触れたような、表記が自然で、そしてわかりやすいかどうか、という点は今後の課題としてここでは考慮していない。
- 3) その分類する条件が正確であるかどうかは今後の調査の話題である。
- 4) 外来語に関して膨大な先行研究（Kubozono 2006等）がなされているが、ポーランド語のカタカナ表記についての研究は殆ど見られない。

参考文献

- Benni, T.
1923 *Fonetyka Języka polskiego*. Gramatyka Języka Polskiego. PAU, Kraków.
- Dogil, G.
1999 “The phonetic manifestation of word stress in Lithuanian, Polish, German and Spanish”. In H. van der Hulst (ed.) *Word Prosodic Systems in the Languages of Europe*, 273–311. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Jassem, W.
1962 *Akcent Języka Polskiego*. Prace Językoznawcze 31. Wrocław-Warszawa-Kraków: Komitet Językoznawstwa Polskiej Akademii Nauk. Wydawnictwo Polskiej Akademii Nauk.
- Kubozono H.
2006 “Where does loanword prosody come from? A case study of Japanese loanword accent”. *Lingua* 116: 1140–1170.
- Łukaszewicz, B. and Rozborski, B.
2008 “Acoustic correlates of word stress in child and adult Polish”. Paper presented at Generative Linguistics in Poland 6, April 5-6, Poland.

表4 28 サンプルの記載されたアンケート用紙とポーランド語の綴り、国際音声記号

アンケート用紙					ポーランド語の綴り	国際音声記号
番号	列①	列②	列③	列④		
1	ワルシヤワ	ワルシヤアワ	ワルシヤーワ		Warszawa	[varˈʂava]
2	クラクフ	クラェクフ	クラークフ		Kraków	[ˈkrakuf]
3	ウッチ	ウウッチ	ウーッチ		Łódź	[wutˈɕ]
4	ヴロツワフ	ヴロェツワフ	ヴローツワフ		Wrocław	[ˈvrɔtˈswaf]
5	ポズナン	ポェズナン	ポーズナン		Poznań	[ˈpɔznaj]
6	ビヤウイストック	ビヤウイェストック	ビヤウイーストック		Białystok	[bʲaˈwʲistɔk]
7	ビェルスコ=ピヤワ	ビェルスコ=ピヤアワ	ビェルスコ=ピヤーワ		Bielsko-Biała	[bʲɛlskɔˈbʲawa]
8	ブイドゴシュチュ	ブイェドゴシュチュ	ブイードゴシュチュ		Bydgoszcz	[ˈbʲɪdgɔʂtˈɕ]
9	チェンストホヴァ	チェンストホェヴァ	チェンストホーヴァ		Częstochowa	[tʃɛˈstɔˈxɔva]
10	グダニスク	グダニェスク	グダニースク		Gdańsk	[ˈgdaj̯nsk]
11	グダニヤ	グダニェヤ	グダニースヤ		Gdynia	[ˈgdɨɲa]
12	グニェズノ	グニェエズノ	グニースズノ		Gniezno	[ˈgnɛznɔ]
13	ゴジュフ=ヴィエルコポルスキ	ゴジュフ=ヴィエルコポェルスキ	ゴジュフ=ヴィエルコポールスキ		Gorzów Wielkopolski	[gɔʐɔvʲvʲɛlkɔˈpɔlskʲi]
14	カトヴィツェ	カトヴィイツェ	カトヴィースツェ		Katowice	[katɔˈvʲitˈsɛ]
15	キェルツェ	キェエルツェ	キェールツェ		Kielce	[ˈkʲɛltˈsɛ]
16	ルブリン	ルウブリン	ルーブリン		Lublin	[ˈlubʲʲin]
17	オルシュティン	オェルシュティン	オールシュティン		Olsztyn	[ˈɔʂtɨɲ]
18	オポレ	オポェレ	オポーレ		Opole	[ɔˈpɔlɛ]
19	プウォツク	プウォエツク	プウォースク		Płock	[ˈpɔwtˈsk]
20	ヤヴォジュノ	ヤヴォエジュノ	ヤヴォースジュノ		Jaworzno	[jaˈvɔʐnɔ]
21	ソポト	ソェポト	ソースポト		Sopot	[ˈsɔpɔt]
22	ジェシユフ	ジェエシユフ	ジェースユフ		Rzeszów	[ˈʐɛʂuf]
23	シュチエチン	シュチエエチン	シュチースチン		Szczecin	[ˈʂtʃɛtˈɕin]
24	タルヌフ	タアルヌフ	タールヌフ		Tarnów	[ˈtarnuf]
25	トルン	トォルン	トールン		Toruń	[ˈtɔruɲ]
26	ザコパネ	ザコパエネ	ザコパーネ		Zakopane	[zakɔˈpane]
27	ザモシチ	ザアモシチ	ザースモシチ		Zamość	[ˈzamɔʂtˈɕ]
28	ジェロナ=グラ	ジェロナ=グウラ	ジェロナ=グーラ		Zielona Góra	[ʐɛlɔnaˈgura]

Transcription of Polish Words into Katakana: A Study on Perception of Word Stress

MARZEC Agnieszka

The Graduate University of Advanced Studies,
School of Cultural and Social Studies,
Department of Comparative Studies

Is the generally accepted transcription of Polish words into *katakana* an optimal one? Could it be improved? Literature from many languages is translated into Japanese every year. Polish literature is not an exception. Proper names and certain words which are typical for Polish cannot be directly translated into Japanese and therefore are transcribed into *katakana*. In some cases of transcription the prolonged sound mark is used for certain sounds in Polish and in others it is not. Why is there such a difference in transcription of Polish language into *katakana*? Would it not be better to unify the transcription by establishing the rule of using the prolonged sound mark consistently or else removing it entirely from the transcription?

This is a preliminary study which raises the question of how native speakers of the Japanese language perceive Polish lexical stress in the case of accented vowel duration and, by implication, whether or not it would be necessary to put a mark of prolongation in all transcribed words of Polish. To answer the question, ten native speakers of Japanese were asked to identify twenty-five sound samples with their various versions of transcription in *katakana* and to choose the version which is the most accurate one. The results show that the transcriptions without any mark of prolongation were recognized as the most accurate in 12% of the cases.

Key words: transcription, *katakana*, Polish, prolonged sound mark, word stress